ある母の回想

欧陽陶承　著
三　好　一監修

至誠堂

監修者紹介

三好（みよし）　一（はじめ）

1921年生。1943年北京華北大学政経系卒。
現在，日中友好協会常任理事，組織文化部長。
主要著訳書：「新中国の基礎知識」「李家荘の変遷」「太陽は桑乾河を照す」「穴にかくれて14年」「青春の歌」。

ある母の回想

昭和36年9月7日　第1刷発行　　定価　200円

著者　欧陽陶承

監修者　三好一

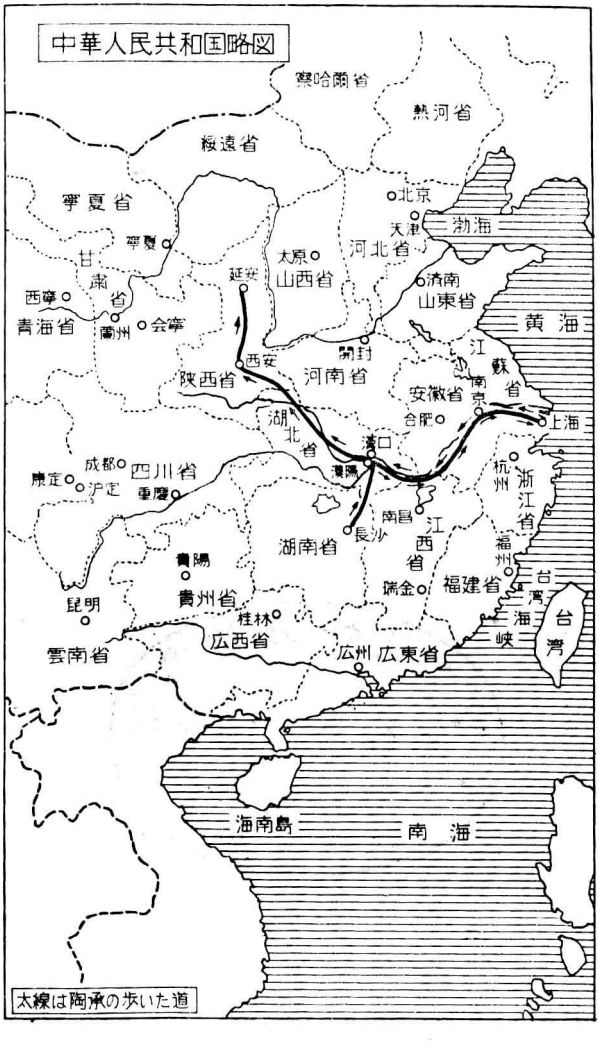
株式会社　至誠堂

電話（201）9543　振替東京 97579

理想社印刷・文宝堂製本

ある母の回想

欧陽陶承著
三好一監修


中華人民共和国略図
察哈爾省
熱河省
極遠省
寧夏省
北京
天津
渤海
寧夏
甘
粛
省
太原
河北省
山西省
延安
済南
山東省
西寧
青海省
蘭州
会寧
黄海
開封
西安
陝西省
河南省
江
蘇
省
南京
安徽省
合肥
上海
湖
北
省
漢口
漢陽
成都
四川省
康定
沪定
重慶
杭州
浙
江
省
南昌
江
西
省
長沙
湖南省
福州
貴陽
台
湾
瑞金
福建省
貴州省
昆明
桂林
海
峡
台
湾
広西省
雲南省
広州
広東省
海南島
南海
太線は陶承の歩いた道

目　次

はじめに／徐特立
「ある母の回想」によせて／謝覚哉
ある母の回想／欧陽陶承
陶承さんの歩みとその背景／神田正雄
おわりに／三好一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

はじめに

この「ある母の回想」(我的一家)は大革命が失敗してからあとのわが党と敵とのたたかいを、ありのままに映しだした物語りである。共産主義者は、老幼男女を問わず、だれもがみな機知に富み、勇敢に敵と対抗できることを描写している。また、この本は、大衆の利益のために自己を犠牲にし、国家の利益のために家庭を犠牲にした典型的な物語りの一つである。毛主席の家庭、蔡和森同志の家庭をはじめ、数えきれないほど多くの革命的な家庭の人びとは、すべて、人は自分のために尽してくれる、自分は人のために尽すのだ、という気高い品性を身につけている。

この本の実例による教育は、人びとに、反革命が行なった人民の虐殺にたいするはげしい憤りと、人類解放のために英雄的な犠牲となった同志にたいするかぎりない尊敬の念をひきおこし、それによって、われわれの愛国の熱情をさらにかきたてる。アメリカ帝国主義の侵略に反対し、嵐のような勢いで社会主義建設をすすめている今日において、われわれは先輩烈士のあのような

毅然とした、勇敢で、国家のために一身を犠牲にする英雄的精神を発揚しなければならない。

これこそが、「ある母の回想」を出版する現実的な意義なのである。

一九五八年九月十四日

徐　特　立

「ある母の回想」によせて

延安にいたころ、陶承同志から断片的に彼女の家の話をきいた。また、ほかの同志たちからも、彼女の息子の立安（リーアン）同志が少年連絡員をやっていたころの機知にとんだ物語りをきかされたことがある。いま、彼女がそれらのことを本に書いた。これはりっぱな本である。彼女の家庭のことが述べられているばかりでなく、この本を通じてわかるのは、帝国主義、封建主義、官僚資本主義の支配がいかに残虐で暗黒なものかということである。また、労働者階級の息子や娘たち、貧しい知識分子、共産党員が、暗黒の支配をくつがえし、圧迫されている階級および全人類を解放するために、先のものが倒れるとすぐあとのものがつづくという苦しいたたかいをつづける姿である。夫が倒れれば、妻はより毅然となり、父親が倒れれば、年若い息子や娘たちはもっと勇敢になって前線にはせ参じる。それはなんと気高いことであろうか！　彼らは勝利を信じている。しかし、自分自身がその勝利をみられるのだということは、念頭においていない。彼らは、勝利と

は血潮と交換でかちとらねばならないものだと心得ているのである。

わたしは欧陽梅生同志とは一度しか会ったことがない。それは、彼が漢陽県委員会の責任者をやっていたころ、ある会議の席でであった。立安同志は少年連絡員として、大江報の配布をやっていた。わたしは当時、大江報の編集者のひとりだったが、環境がひどく悪かったため、編集、印刷、配布はすべてべつべつのルートでやっていた。だから、ひじょうに残念なことに、わたしはこの勇敢で、機知に富んだ少年闘士に会ったことがない。

陶承同志は正規の学校にいったことはないが、かつて梅生同志から詩を学んだことがある。彼女の話では、梅生が家庭教師をしていた地主の家の庭はすばらしいものだったそうだ。ある夜、梅生は答案に筆を加え、彼女は針仕事に精をだしていたが、二人で窓をあけてみると、おぼろの月光に樹影と池の面が照らしだされ、濃い緑はまさにしたたるばかりの風情をみせていた。そこで梅生はつぎのような詩をよんだという。

夜静尋詩味　夜があまり静かなので詩を語りたくなった
閑談仔細評　ひまにまかせて心ゆくまで語りあった

共憐秋月老　二人で秋の月の細くなったのを憐んでいると
山塘翠已深　山裾の緑もすでに秋色が濃い

陶承同志のことばによれば、「その時の情景は、たしかにわたしたち二人を自然の懐のなかに深く陶酔させてしまいました。わたしはまだ詩がわかりませんでしたが、その詩の調子は、今でもまだはっきりと覚えています。もっとも、字をまちがえて覚えているかもしれませんが……」ということだ。そこでわかることは、この一組の年若い夫婦が、いかに祖国のうるわしい山河を愛し、そのなかで自由に働き、自由に暮してゆきたいと望んでいたかということである。しかし、当時の社会は、彼らがそのようにすることを許さなかった。そこで彼らは、やむなく社会を改造する途を歩みはじめたのである。

また陶承同志は、「ある日、紅楼夢を読んでいて、林黛玉の葬花の詞、『一朝春尽きて紅顔老ゆ、花落ち、人亡びて両に知らず』のところを声に出して読んだら、梅生がそばできいていて、はらはらと涙を流したことがありました」とも語った。それからかなりの歳月がたって、梅生同志がこの世を去ってからしばらくしたころ、わたしは陶承同志の書いた孤燕の詩を読んだ。

梁上有孤燕　梁の上に燕がたった一羽
晨去暮帰来　朝でかけては日暮に帰ってきた
不知説何事　何を語りかけているのかわからないが
喳喳費我猜　チ、チと鳴く声に私は頭をかしげた
玫瑰紅朶朶　野バラ、赤いバラ
青春能几回　青春は二度とかえってこない
回憶当年事　当時のことを回想すると
猶然令人悲　じーんと胸が痛んでくる

梅生も陶承も、ともに貧しい家に生まれた孤児である。ふるい社会にたいしてあるのはただ恨みだけで、未練はない。彼らの真摯な愛情は発展してゆき、革命の闘志をかためる強いきずなとなった。だからこそ、そこから革命のつぎの時代の子が生まれてきたのは、まったく理解できることである。

一九四七年、胡宗南匪軍が陝甘寧辺区に進攻してきた。われわれは一方では、胡宗南の二十数

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

万のいわゆる精鋭部隊を辺区の山岳地帯でせん滅しつつ、一方では東北、華北で大規模な解放戦争を開始して、中央機関は東方に移動した。陶承同志は、数年前の東征中に可愛がっていた一番下の息子を失っていたにもかかわらず、このときまったく晴々とした気持でいた。そして、紅雲の曲をものにした。

朶朶紅雲直向東　無数の赤い雲がまっすぐ東へ向う
荷花出水満池中　蓮の花は池に咲きみち
迎風姣絶清香意　そよ風に清らかな香をまきちらす
白藕連心味更濃　蓮の根はかたく一つにつながっている

朶朶紅雲直向東　無数の赤い雲がまっすぐ東へ向う
黄河対岸炮轟轟　黄河の対岸には砲声がとどろいている
消滅劉戡幾個旅　劉堪の数個旅団をせん滅された
人民軍隊是英雄　人民の軍隊は英雄だ

朵朵紅雲直向東　無数の赤い雲がまっすぐ東へ向う
伝来捷報喜重重　つぎつぎと伝えられる勝利の知らせ
土改狂潮滅封建　土地改革の高潮が封建制をつぶし
南北東西正反攻　東西南北、まさに総反攻の時

母親の気持は、蓮の芯よりもっと苦い。だが革命の勝利は、花よりもさらに香わしい。陶承同志は、自ら慰めることができたのだ。

親愛なる読者のみなさん、男女青年のみなさん、陶承同志の家庭は、犠牲となって奮闘した数千数万の革命的家庭の一つにしかすぎないし、彼女の家族で犠牲になった人は、数千数万の先烈、英雄的人物の中での数人にしかすぎないのだ。彼らの血それこそが、六億人民の解放をもたらしたものである。われわれはよく、烈士の血潮の跡をふみしめながら前進するというが、このことばを当時のことでいえば、一人が倒れれば、さらに多くの人間が立ちあがり、仲間のしかばねを埋葬し体についた血潮をぬぐい去ると、すぐさま戦闘に身を投じていったということであり、今のことでいえば、無数の先烈の血が、半封建、半植民地の社会をつくりかえ、繁栄と幸福の社会

主義社会をうちたてる途をきりひらいたということである。われわれはこの途を前進し、さらに断乎として、さらに勇敢に、積極的に考え、積極的に発言し、積極的に行動しなければならない。われわれと血を流した先烈との心は、しっかりとつながっているのである。

われわれは平和を愛する。しかし、祖国をまもり、圧迫に反対するためには、われわれの先烈は戦争をおそれなかったし、われわれもまた戦争をおそれない。もしアメリカ帝国主義が、敢えてむりやりに戦争をわれわれの頭上におしつけるならば、また、わが領土——台湾の解放を敢えて妨げるならば、われわれは必らず侵略に反抗するためにたたかい、断乎として、徹底的に、きれいさっぱりと一人残らず侵略者をほろぼすであろう。

犠牲となって倒れた人民の英雄、そのいさおしは永遠に不朽である！

一九五八年九月八日

謝覚哉

ある母の回想

わたしの家の人たち

欧陽梅生	オウヤンメイション	中国共産党員	
陶承	タオチョン	欧陽梅生の妻、著者	
立安	リーアン	長男	
応堅	インチェン	次男	
稚鶴	チーホー	三男	
本紋	ペンウェン	長女	
本双	ペンスワン	次女	
双林	スワンリン	三女	

わたしの家は大所帯で、みんなあわせると十七人になります。わたしは革命幹部ですが、もう老齢で、いまではきまった仕事はうけもっていません。息子夫婦は湖南の鉱山、娘夫婦は武漢でそれぞれ働いています。娘の家の長女は航空学院、息子の家の長女は中学、あとのちびさんたちはみんな小学校にあがっています。それから数え年三つになる孫が一人いますが、この子はわたしがちょっとでも目をはなしていると、すぐに机のうえにはいあがり、さっさとラジオのスイッチを入れて、「ぼく、毛主席のおはなちきく」といってききません。

けれども、わたしのお話ししたいのはこの家のことではありません。この家のことなら、もう「しあわせ」の一語につきているので、いまさら何も話すことはありません。

わたしのお話ししたいのは、むかしの家のことです。つまりわたしの家の歴史、なかでも夫の欧陽梅生、息子の欧陽立安と稚鶴、そういう家族の者のことです。夫とこの二人の息子は、革命のため、人民の事業のために命を捧げました。あの人たちが逝ってもう随分になります。

わたしは家で老後をおくっています。いつもは本を読んだり、子守りをしたりしていますが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb